

水彩 Technique。



メディウム！

新しいテクニックが新しい作風を生み出す、ということが水彩の世界でも始まっている。絵具自体を自作することで、水彩のタッチを変えたり、色合いに変化をつけたり、にじみを調節したり、マスキングをしたり、白抜きをする。メディウムを使うことで表現が変わっていきます。ホルベインから本格的な水彩用メディウムが出ました。専門店で。

<ホルベイン水彩用メディウム シリーズ>オックスゴール/サイジング リキッド/ウォーターカラーメディウム/アラビアゴム メディウム/アラビアゴム ベースト/イリデッセント メディウム/マスキングインク/マスキング インク クリーナー/水彩画 保護ワニス/UVグロス パーニッシュ/UVマット パーニッシュ

ホルベイン工業株式会社 東京都豊島区東池袋2-18-4 TEL.03(3983)9251 大阪府東大阪市上小阪1-3-20 TEL.06(6723)1554



holbein

www.holbein-works.co.jp

holbein

蔡國強

鷹見明彦 文

晴天の霹靂

黒い虹



1987年、来日して間もなく東京・板橋のアパートで。原始の象形や神話による「太古の烙印」の連作に囲まれて。中国で制作していたキャンバス上で火薬を爆発させて油彩と混合する「火薬画」の大作とともに海を渡ってきたが、自分の作品の発表の場がどこにあるのか不明だった



太古の烙印 楚の霸王
1985
キャンバスに油彩、火薬
150×155cm

1985 「私は暴力がすべてを創造し、
またすべてを破壊したことをよく知っている」

東京郊外の小さなロフト・スペースに長身を縮めて座っていた一人の中国人画家。蔡國強（ツァイグオキヤン） 1987年の夏。大作が壁になつたギャラリーの暗がりには、まるで象形文字が描かれた洞窟のようなカオスに火薬の匂いが漂っていた。片言の日本語と漢字の筆談によれば、むかしマルコ・ポーロが立ち寄つた福建省の古都、泉州の出身で、上海の美術大学を出て私費留学で来日して半年、日本語学校に通つて……。《太古の烙印》（1985）は、キャンバスを丸めて中国から持ってきた「火薬画」の大作の1点。初期の作品はどれも、油彩で描いたキャンバス上で火薬を爆発させている。（80年代までの中国の美術は、社会主義リアリズムが、民俗的な芸術、伝統的な中国画しか公認されていなかった。自分はシルクロードやチベット高原を旅したり、ふるさと福建の自然のなかに残る原始の洞窟画や神話を題材にして、人間の普遍性を求めていた」と、蔡は



Project for ET No.1 人類の家
麻布、木、導火線、火薬ほか
1989年11月11日「多摩川ふっさ野外
美術展'89」でのイベントより

1989

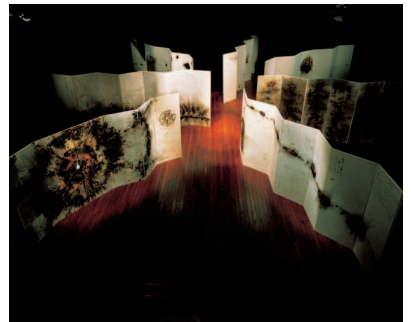
「爆発の瞬間、すべての存在はわれを忘れ、
時空は誕生の原点にもどります」

語った。

「創造と破壊を人類にもたらした
中国四大発明のひとつである火薬
を使って、その爆発の瞬間に規制に
みちた有限の現実をこえて、宇宙
の本源に還る」のだと。

少年期には文革の嵐と暴力を間
近に体験し、ようやく訪れた解放
の波にのって大陸からやってきた中
国人青年にとりて、バブル経済が絶
頂から崩壊へと向かう東京での見
聞は、タイム・トリップにも似た体
験だった。板橋の路地奥のアパート
に同郷の画家である妻、呉紅虹と
雌伏した日々。イヴ・クライン、ヨ
ゼフ・ボイス、クリスト、もの派……。
未知の現代美術の道すじに触れな
がら、最新の宇宙論や地球物理学、
遣伝子や生命論にも親しんだ。玩
具花火をほぐした少量の火薬をひ
そかにバスタブの内で爆発させて、
試行はつづいた。

しばらくして、打ち上げ花火の
丸玉屋小勝煙火店の協力を得て、
日本での本格的な火薬画の制作が
可能になった。それとともに作品は



原初火球-The Project for Projects 1991 パネルに和
紙、墨、火薬 P3 art and environment(東京)でのイン
スタレーション

キャンバスからインスタレーションへ
と展開し、直接オープン・エアの環境
や空間でのプロジェクトへと広がった。
《Project for ET No.1 人類の
家》(1989)は、後に世界中で実現
されていく火薬によるプロジェクト
の第1作。東京近郊、多摩川の河
原に遊牧民の移動式住居を模した
テントを仮設して、導火線で火薬
を爆発させた。この作品には、同年
5月に起こった天安門事件の犠牲
者への鎮魂と、国境をこえて地球自
身を住み家とした遊牧民の自由への
憧れがこめられていた。



黒い虹 バレンシアのための爆発プロジェクト スモーク弾
2005年5月22日、12:05pm
スペイン、バレンシア
Photo Juan Garc Rosell, IVAM
and J.C.Pestano

2005 「個人の想像力や方法が、地球人としての普遍的な感情、環境や生命の問題と、どのように関係するか」

ソビエトのベレストロイカ、ベルリンの壁の崩壊、東欧のドミノ的な自由化と冷戦の終焉……。20世紀の最終コーナーを待ちかねたように急展開した時勢と火薬プロジェクトの始動は、明らかに共振していた。89年2月に中国初の公認の現代芸術展が北京美術館で開催された直後、天安門事件による暗転は、内外で現代美術を推進していた中国のアーティストたちをきびしい立場においたが、歴史の奔流に後もどりはなかった。

1990年夏には、ミツテラン政権のフランスの支援で、中国国外にいた作家たちとボンビドゥー・センターで開かれた、大地の魔術師たち展(1989)に参加した作家がエクス・アン・プロヴァンスの村に結集して、「中国の明日展」が開かれた。地表にクレーター・モデルを散在させて爆破した蔡の点火でオープンしたこの展覧会は、チャイナ・アヴァンギャルドとよばれることになる中国現代美術の国際アートシーンへのデビューとなった。

《原初火球 The Project for Project》(1991)は、火薬プロジェクトの計画ドローイングを屏風上に火薬で描き、ビッグ・パンをイメージして配置したインスタレーション。当時、東京・四谷の禅寺の地下にあったP3のスペースで発表された。筑波山麓の花火工場での制作中には、湾岸戦争がはじまった。火薬で焼き付けられたこのプロジェクトは、ドイツのNATO軍の基地跡(《Project for ET No.4 胎動》、1992)やゴビ砂漠(《万里の長城を1万メートル延長するプロジェクト》、1993)などで実現されていた。

95年には9年間の日本滞在を終えて、ニューヨークへ移住。以後は、マルチ・カルチュリズムの追い風にものつて、火薬プロジェクトにとどまらない融通無碍の作品展開で瞬く間にアートシーンのスターダムへ上った。風水、漢方薬、文化大混浴……東西のカルチャー・ギャップのツボをついた批判精神とタオイズム風の機知に富んだスケールの大きなその表現は、ヴェネツィア・ビエンナ



イギリス、エジンバラのフルーツ・マ
ーケット・ギャラリーにて。個展《影
の下の生命》(2005)のパフォーマ
ンスで人型の紙人形を燃やす。来年
夏には、ベルリンのグッゲンハイム
美術館とメトロポリタン美術館で
の個展、その後は2008年北京オリ
ンピックの火薬プロジェクト、ニュ
ーヨークのグッゲンハイム美術館
から巡回する回顧展などが予定さ
れている。
撮影=辰巳昌利

ツァイ・グオチャン 1957年中国・福建省泉州市生まれ。85年上海演劇大学美術学部卒業。86年来日。89～91年筑波大学研究生。95年渡米。以後、ニューヨークに在住。99年ヴェネツィア・ビエンナーレ国際金獅子賞受賞。主な個展に91、93年P×(東京) 93年万里の長城(中国) 94年いわき市立美術館(福島) 世田谷美術館(東京) 97年クイーンズ美術館(ニューヨーク) 98年台湾省立美術館(台湾) 99年クストハール・ウィーン、2000年カルティエ現代美術財団(パリ) 01年APECイベント(上海、中国)、リヨン現代美術館(フランス) 02年上海美術館(中国) ニューヨーク近代美術館、03年テイト・モダン(ロンドン) セントラル・パーク(ニューヨーク) 04年スミソニアン博物館(ワシントン) 05年ケネディ・センター(ワシントン) など。主なグループ展は、90年「中国の明日(フランス) 91年「非常口(福岡) 94年「闇の中心(クレーラー・ミュラー美術館、オランダ) 95年ヨハネスブルク・ビエンナーレ(南アフリカ) 「開館記念-日本の現代美術(東京都現代美術館) 95、97、99、01、05年ヴェネツィア・ビエンナーレ、96年「ヒューゴ・ボス賞展(グッゲンハイム美術館ソーホー、ニューヨーク) 96、04年サンパウロ・ビエンナーレ(ブラジル)、98年台北ビエンナーレ(台湾) 99年「時代精神(クンストハーレ・ボン、ドイツ) 00年ホイットニー・ビエンナーレ(ホイットニー美術館、ニューヨーク)、上海ビエンナーレ(中国) 横浜トリエンナーレ、03年「Alos? china(ボンビッドゥー・センター、パリ) 04年「金門トーチカ美術館(金門島、台湾) 05年「宇宙的な経験(シカゴ現代美術館) 「量子の目(ハーバード大学美術館、アメリカ) など。

ーレ金獅子賞受賞や欧米の主要美術館、国際展にとどまらず、5大陸に及んでパフォームされている。
《黒い虹》 バレンシアのための爆発プロジェクト(2005)は、世界をめぐる龍か風水師のように活躍する蔡の近況を伝える最新のプロジェクトのひとつ。2005年5月、スペインのバレンシア市内で実現されたプロジェクトだが、黒煙が発生するス

モーク弾が使われている。閃光と白煙を見せる従来のプロジェクトに対して、この《黒い虹》は、日常を覚醒させるような爆発音とともに、白昼の晴天に出現した。古来、虹は、天からの知らせと受けとられてきたが、蔡の煙火は、むかしの烽火(ほくわ)がそうであったように、人々に火急を知らせる警報を意図している。《黒い虹》は、渡米以後、ネヴァダの核実験場跡地やマンハッタンなどの各地で小さなキノコ雲を発生させてきた「キノコ雲のある世紀 20世紀のためのプロジェクト」(1996)とも呼応して、いまだ大量に潜在し拡散を懸念(けんねん)される核の脅威を映している。
「晴天の霹靂(へきれき)」とは、平穏な日常を突然に切断するような出来事のとえだが、新しい世紀をテロとともに生きる私たちの上空に兆(めざ)すその黒いサインは、いつの時代も災厄は人知をさらに超える現れ方で、試練をあたえてきたことを本性的に想起させる。